
絶対王制Man

不知火焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対王制Man

【Nコード】

N4962A

【作者名】

不知火焰

【あらすじ】

主人公、栗栖^{クリスレイプ}聖夜の父が本社へと異動するために聖夜も転校する事になった。転校先の学校で一目惚れした相手は見た目はいいのに中身は絶対王制な最悪な奴だった。そんな二人のラブコメです。

やっぱり人間中身だよな

『お帰りなさい、聖夜^{イブ}』

そう言つて私を迎えたのは、異常なまでの笑顔な母だった。

「なによお母さん？そんなにニヤニヤしちゃって…」

私は眉間に皺を寄せながら母を見た。

母はさらに笑みを深めて私の肩に手をおいた。

とりあえず早くあがらせてほしい。

まだ靴はいたままだし。

着替えたい。

そんな事を考える私にはまったく気付かずに母はどうしようかしら
ゝ、なんて笑っている。

「じゃあ聞かなくていいや」

そういつて強引に上がろうとすると母はああん、聖夜ちゃんたらつ
れないわねえといいながら肩に置いた手に力を入れた。

『実はね、パパが本社に異動になったのよ！！』

「へえ、やるじゃんお父さんてば」

『しかも部長になるの！！お母さんうれしくて仕方ないわ！！』

母は言いながら私をかくかくと揺さ振った。

「はいはい。あれ、でも本社って…」

『そう。だから引越すのよ。もちろん学校も変わるわ』

空が落ちてきたみたい！！！！某ジ○リアニメの台詞が頭を過った。

こうして私は“あいつ”がいる学校へ転入する事になるのだ。

そしていよいよ運命の日が訪れた。

そう、最低最悪な“あいつ”に。

本社がある町は以前住んでいた町に比べるとずいぶん都会だ。

私が通うこの山田高校は前の学校より敷地面積、校舎ともに比べも

のにならないくらい広い。
びくびくしながら門をくぐった。

まだ登校時間なため、登校してきた生徒達に見られている。
確かに見たこともない人がいたら気になるよなと思いながら校舎へ
足早に向かった。
その時だった。

『いらっしやったぞ!!』

そんな声が聞こえて私は振り返った。
すると黒塗りの車から人が降りた。
私はその人を見て一瞬動きが止まった。
だって、だって!!

その人は同じ生き物とは思えないくらい綺麗な人だったから。
なんか、王子様みたい。
実際に見たことはないけど、きっとこんな感じなんじゃないかなっ
て。

その人が取り巻きを引きつれて歩き始めた。
立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。
女の人に使う言葉だけどこの人になら使っても違和感はないと思っ
た。

しかしそんな時間は長くは続かなかった。

その人は校庭中に響き渡りそうな声でこう言った。

『道をあける、愚民どもおっ!!!!!!』

その瞬間に、はかない恋心は脆くも崩れ去ったのだった。その自意
識過剰なわがまま王子は、見事なまでの絶対王制ぶりを発揮した。

『じゃまだ愚民共! 俺様の道をあける!!』

そう言いながら優雅に歩いている。

なんなんだ!!

さっきまでのトキメキを返してほしい。

私は巻き込まれないように急いでその場から離れていった。

「ああ、職員室どこだよ」

せっかく急いで来たのに職員室がわからないんじゃない意味がない。苛々しながら学校中を歩き回る。

歩けど歩けど職員室は見つからない。

そして苛々が最高潮に達した時だった。

『おい、そこのお前』

忘れてたくても忘れられるはずがない。

この声は…

『拳動不振な奴め。お前、見たことない奴だな？誰だよ』

それが初対面の人に対する態度かああ！！！！？

私はその男にずかずかと歩み寄り睨みあげた。

「拳動不振でわるかったわね！！」

仕方ないじゃない！！

今日この学校来たばかりなんだから！！

『…愚民が俺に口答えとはいいい度胸だな？』

綺麗な笑みに思わず見とれてしまった。

騙されるな私！！

そう自分自身に言い聞かせながらさらに睨む。

『名前は？』

「はい？！」

『名前だ。このアマ』

くっそあ！！！！！！

見た目は王子なのに！！

性格は最悪だ！！！！

この絶対王制マン！！

あ、この名前いいかも。

その瞬間から王子は絶対王制マンにかわったのだった。

セレブとパンピー

あれから名前は決して言わなかった。

そしていよいよ新しいクラスメイト達とご対面！！
それなのに…

何故みんな私と目を合わさないのですか？？

その時、ふと絶対王制マンの言葉を思い出した。
『俺様に逆らった事きつと後悔するぜ』

あいつか。

今更事の重大さに気付いた。

みんなの事を愚民呼ばわりするくらいだし、みんなも何も言わない
という事は、何かがあるという事だ。

きつと親が金持ちで〜とかそんなところだろう。

しかし私はこの時忘れていた。

重大な事を。

絶対王制マンのせいで今だに誰も話し掛けてくれない。

話し掛けようとしてもにげられる。

私が何をしたというのか。 あんな理不尽な態度をとられて黙ってな
んていられるわけがない。

おかしいのは私じゃなくてみんなの方だ。

そんな事をもんもんと考えていた。

『おい、くそアマ』

「うるさい黙ってて。今考え事してるのよ!」

『少ない脳みそで何考えてるんだ?』

「どうしたら絶対おうせ…ぎゃほっ!」

絶対王制マンがいきなり現れるから変な叫び声あげちゃったじゃないか!!

私を変人にしたてあげようという作戦か!!?

『くそアマ、お前、栗栖聖夜とかって名前なんだな?』

「だったらなんなんですか?」

ギロリと睨むもののまったく効果はないようだ。

『いや。たいした事じゃない』

絶対王制マンは何か考えるような仕草をしたあと、にっこりと笑った。

うつ!

笑顔が眩しい!!

『まあ、俺様から言えることは一つだな』

「結構です」

すかさず断る。

『まあ聞けくそアマ。お前が俺に頭を下げる日もそうとくくない』
いやいや、ありえませんか。

とは言えずにじとーっと絶対王制マンを見る。

『頭からっぱのお前に一つヒントをやるう。俺様の名前は火向井彰^{ヒムカイ アキラ}だ』

そう言いながら絶対王制マンは帰っていった。

一体何をしたかったんだろうか。

絶対王制マンが私のところへ来たせいでさらにクラスからは浮いたようだ。

ちくしょう。

絶対王制マンは疫病神だ。

心のなかで絶対王制マンに一発おみまいしてやった。すると少しだけ気が楽になった…きがする。

「ただいま」

『聖夜!!』

声を聞き付けた母が泣きながらやってきた。

「ちよ、鼻水つくから」

そういつて引き剥がそうとするがなかなか離れない。『聖夜…』

「お父さん…仕事は？」

『…った』

「え？」

『父さん、クビになった』

正直耳を疑った。

理解するのにだいぶ時間がかかった。

だって、昨日の今日で…いきなりクビ…？

「なんで？」

『父さんだって、なんでクビになったかわからないんだ!!社長が突然クビだっておっしゃったんだ…』

がつくりとうなだれるお父さん。

その姿はなんとも痛々しい。

その時ふと、あの言葉を思い出した。

“頭からっぱのお前に一つヒントをやるう。俺様の名前は火向井彰だ”

「ねえ、お父さんが努めてた会社…なんてところ？」

『火向井コーポレーションだ』

その瞬間すべてを理解した。

私がすべき事は一つだけ。

殴り込み！！いざ火向井邸へ

とにかく私は走っていた。

“俺様の名前は火向井彰だ”

つまり、お父さんは私のせいでクビになったって事でしょ！？
私が絶対王制マンに目をつけられたから…。

お父さん、お母さん、ごめんなさい！

私…。

私…。

『火向井さんのお宅？それならあの丘の上にある家よ』

「ありがとうございます」

親切なおばさんにお礼を言っ、私は絶対王制マンの家を見上げた。
あの傲慢な絶対王制マンに似合った無駄に大きい家だった。

丘に登り、いよいよもうすぐ絶対王制マンの家だ。

「よし」

ゆつくりとチャイムを押した。

心臓の音がうるさい。

『はい、どちら様ですか？』

可愛らしい女の人の声が聞こえた。

「あのう、えっと、私、栗栖って言います。あ、彰くんに会いたいですけど…」

彰くん、なんて奴を呼ぶのはこれが最後だ。

そう思いながら私はごくりと唾を飲んだ。

『彰様のご学友の方ですね。彰様から伺っております。お入りくだ

さい』

その声と同時に門が開いた。

今更不安になつてきた。

でも、ここで引き下がるわけにはいかない。

意を決して私は一步前へと踏み出した。

『いらつしゃいませ』

数人のメイドさんが律儀にも玄関前で私を迎え入れてくれた。

「こ、こんにちは…」

緊張しながら挨拶をすると、一人のメイドさんが一步前へ出た。

『こちらです』

そついいながら私が家の中に入るように促す。

メイドさんにお辞儀をして中へと足を踏み入れた。

「うわぁ」

絶対王制マンの家は、とても広く綺麗だった。

玄関の上にある明かりとりの窓は綺麗なステンドグラスだった。

日が差し込んで広いホールの床に色とりどりの色がうつっている。

『栗栖様、こちらです』

メイドさんに声をかけられてやっと我にかえた。

慌ててメイドさんの後についていった。

『こちらへ』

そついつて招き入れられた部屋は白を基調とした明るくて、暖かい雰囲気の一部屋だった。

掛けるように促され、二脚あるうちの一脚に腰掛けた。

すぐ目の前にあるテーブルに、おいしそうな紅茶とお茶菓子が置かれた。

『もつしばらくで彰様がいらつしゃいます』

そう言い残してメイドさんは部屋から出ていった。

接触、親不孝娘

なかなか絶対王制マンがこないのので私は紅茶を飲みながらクッキーを食べていた。

「おいしい」

ほっと一息ついた時だった。

『やっぱり来たんだな、くそアマ』

ぱつと大げさなりアクションで振り返ると、爽やかに笑う絶対王制マンがいた。

爽やかな笑みも今ではどす黒く見える。

『俺様に謝る気になったか？』

白々しい奴め！！！！

「なんで私が謝るのよ！！人の親のクビ切つといて！！！」

絶対王制マンはあはははとお腹を抱え込んで笑った。

苛々する。

『俺様に楯突いたお前が悪い』

笑みは崩さないままニヤリと笑った。

そしてドアのほうから私の方へと向かってくる。

『お前みたいな貧乏人が、俺様に逆らうなんておかしいんだよ』

絶対王制マンはとうとう私の目の前にきた。

『おとなしく俺様の言うことを聞いていればいい』

ブチっと何かが頭の中で切れる音がした。

「ふざけるなあ！！！！」

がばつと絶対王制マンに掴み掛かった。

ほんのりと甘い匂いがした。

「あんたねえ、まだ親のすねっかじりの鼻垂れ小僧の分際でなに

ってんのよ！！偉いのはあんたじゃなくてあんたの親なのよ！！悪いけど私はあんた見たいな奴は死ぬほど嫌いだ！！」

そっいいながら絶対王制マンに思い切り平手打ちを食らわせた。

絶対王制マンは頬を押さえながら目を見開いてこっちを見ている。

「もう好きにすれば！！？それでもうお父さんが社員じゃないから私も関係ないし！！もう関わらないで、さようなら！！」

呆然としている絶対王制マンを無視して走って部屋から飛び出した。

気付いたら家の前にいて、がむしやりに走って帰ってきたものだからどうやって帰ってきたのか不思議だった。

俯き加減で玄関の戸を開けた。

「ただいま……」

『おかえりなさい』

出迎えてくれた母の目はまだ潤んでいた。

「ごめんなさい、私……」

『聖夜のせいじゃないわ』すべてを話しても、それでも母は笑っていた。

それが痛々しくて仕方なかった。

結局絶対王制マンには謝れなかったよ。

しかもおまけにあんな啖呵まできっちゃった。

ああ、私はなんて親不孝娘なんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4962a/>

絶対王制Man

2010年11月10日14時27分発行